

次の授業に向けて特別教室へ移動している最中に、教本を一冊机の中に置きっぱなしにしているのに気が付いた。

「ごめんなさい、先に行つてて？」

友人たちにそう告げてから来た道に戻る。ドアを隔てた教室から男子たちの談笑が漏れ聞こえてきた。彼らも移動教室のはずなのに、ずいぶんと悠長だ。

かまわず扉を開けようとしたところでひとりの男子生徒がアルレリオの名前を呼んだ。

「アルレリオはルーチェと付き合ってるんだろう？」

「ルーチェとは婚約者だけど、それがどうしたんだい？」

アルレリオはこの国の王子様で、それなのに気取ったところがない人当たりのいい性格をしている。おまけに成績優秀で顔も整っているものだから、男女問わず彼は人気があった。生まれ持った色彩さえも美しく、少し癖のある金色の巻き毛と陽光がきらめく海のような青い瞳に目を奪われない人はいない。わたしは公爵家の生まれだが、特に傑

出した才能がない。容姿も平凡で、人より優れているところをあえてあげるとするならば、人より胸が大きいことくらいだ。けれども手足がすらりと長いわけではないので、少し太って見えてコンプレックスだった。髪と瞳の色もありふれた栗色。そんな外見だから、アルレリオと並び立つと差異が際立ってしまう。親同士の思惑が一致して婚約したとはいえ、自分が隣に立っていいのか迷うくらい素敵な人だ。

「どうしてルーチェなんだ？ アルレリオならもっと美人とも付き合えるだろうに」

「ばか、王子が自分の一存で結婚相手を決められるわけないだろう」

話の矛先が自分に向いて、思わず壁に身を潜めて聞き耳を立てる。盗み聞きなんて誉められたことではないが、自分の名前が出たら気になってしまう。

「公爵家のご令嬢にしちゃあ、ちょっと地味だよな。でも豊満なカラダは魅力的だな。

あの目のやり場に困る胸、学年の中で一番でかいんじゃないか？」

わたしの美点をそれしか思いつかなかったのだろう。失礼な男子がアルレリオに同意

を求める。一人が失礼なことを口にすれば、彼らのなかでわたしは貶しい女になったのか、ほかの男子生徒も調子に乗りはじめた。

「たしかに、後腐れがなければ一度お願いしたいくらいだ。アルレリオ、一晚だけ貸してくれないか？」

「お、それいいな。オレもお願いしようかな。洗脳魔法でも使ってアルレリオと思い込ませてよ。そうすりゃ気付かないって」

わたしはあまりにおどましい会話に思わず声が出そうになってあわてて口を塞ぐ。彼らは冗談のつもりかもしれないが、度を越している。もう教科書をなんてどうでもいいから、早くこの場から離れたかった。けれどもある不安が湧き上がって、その場を立ち去ることができない。

——アルレリオ、まさかそんなおどましいこと受け入れないわよね？

胸の中に不安が渦巻く。彼はわたしを庇ってくれるだろうか。大切な恋人にそんなこ

とを言うなど、怒ってくれるだろうか。彼はいつも優しく紳士的にわたしに接してくれている。艶めいたこともする仲だから、けっしてわたしを嫌ってはいないはずだ。

けれども、わたしを大切にしてくれているのは家同士の関係に波風を立てないために過ぎないとしたら。

もしわたしを侮辱しながらいやらしい目で見ている男子生徒に同調されたらとても立ち直れない。貴族達の醜聞では、ときおり耳を疑うような刺激的な遊びに耽った人の話をきくこともある。アルレリオもそんな遊びを望んでいたらどうしよう。

壁一枚隔てた空間の会話にずっと耳を傾けていると、ふいに予鈴が響き渡った。それに気付いた男子は会話を止めて、椅子を引く音がガタガタと響く。

——まずい。

もしアルレリオと鉢合わせでもしたら、なにも聞いていない振りはできない。絶対顔

に出てしまう。

わたしはあわてて、物陰に身を隠す。彼らが教室から出て行ったのを見届けてから机の教本を取り出して、急いで移動教室に走った。その日はまったく集中できなかった。

翌朝の目覚めは最悪だった。充分眠ったはずなのに疲労感が身体にまとわりついて、身体も気持ちも重い。寮から教室への道のりを何度も引き返そうか迷ったが、気が付けば見なれた校舎を見上げていた。

友人は顔色が悪いから休めばどうかと気づかせてくれたが、卒業まで彼らとずっと顔を合わさないといけないのだ。距離を取るために休んでしまえば、わたしの卒業が危うくなってしまう。

意を決して教室の扉を開ける。警戒しながら彼らを探すがどこにも姿がない。

「……あら？お休みなのかしら」

二人が見当たらずにほっと息を吐いたところで、担任の教師が入ってくる。教卓から告げられた言葉に、わたしは耳を疑った。

「……家の都合で別の学校に編入することになった？」

なんでも二人とも、父親が中央から地方に派遣される役人選ばれ、家族ともども転

居することになったのだそうだ。その準備で忙しく、顔を出す暇もないためしばらく休みをとって、そのまま転校になるらしい。一人だけならまだしも、二人とも挨拶もなく学校を去ってしまう。それも時季外れの辞令によって。

全寮制の学校に通う若い男女は、つねに新しい娯楽に飢えている。二人も同時に生徒が転校し、しかも不審な点が多いとなれば格好の噂の種になった。さっそく、クラスメイトは教師の目がなくなった瞬間にあらこちらで親しい者たちで集まり声をひそめながら囁き合った。

「……ちょっと変じゃない？あの家は三年前にお父様が十年の任期を終えて中央に戻ってきたばかりじゃない。だから都の王立学園に入学したんでしょ」

「もう一人だって軍人のお父様が任務を終えて都に戻ってきたばかりって聞いたぜ」

「ご家族か誰かが上級機族のご不興を買ったのじゃなくて？」

「まさか、でもあり得るな」

級友たちのあれこれと邪推する会話を聞きながら、わたしは胸騒ぎがしていてもたつてもいられずに自席に座っている婚約者に話しかける。

「あ、アルレリオ」

「どうしたんだい？ボクのかわいいルーチェ」

いつも通りの穏やかな笑みを浮かべる彼に拍子抜けする。変わった様子のない彼に、どうやらわたしの勝手な思い違いだったと悟る。タイミングが出来すぎているが、それだけだ。家の都合でわたしと婚約しただけのアルレリオが怒りのままに彼らを地方に飛ばすなんてあるわけない。アルレリオはわたしに対してそこまでの執着も愛情もない。

情事の時にはあまく優しい言葉をかけてくれるが、紳士的な彼のことだ。おそらく婚約者に対する望ましい態度をとっているだけで、わたしが特別なわけではない。

「いえ、特に用というわけじゃないのだけれど。そのあなたとおしゃべりしたかっただけなの」

誤魔化しながら目を伏せれば、おもむろに骨ばってすらりとした指がわたしの手を取る。

「ルーチェったら、かわいいね。そうやってボクを舞い上がらせてどうするの？」

ハチミツのようにどろりとしたあまい声が鼓膜を震わせる。それが情事のときの響きと似ていて、人目があるというのに下腹部がきゅんと疼く。頬が熱くなって、慌てて手を振り払った。

「ちょ、ちよつとアルレリオ、やめて。みんな見てるから恥ずかしいわ」

ちらちらとこちらを窺う周囲の視線に恥じ入りながら俯けば、アルレリオが微笑みながら耳に唇を寄せる。

「今夜、キミの部屋にいくね。キミがしてほしいこととしてあげる♡」

ねっとりとした囁き声にひくっ♡とおマンコがわなないてぬかるむ。じわつと愛液がショーツに染みこむ感覚に、腰がぶるっ♡と震えた。

ほかほかと湯気の立つ身体が熱い。この身体の熱さは、湯浴みのせいだけじゃないと知っている。何度身体を重ねてもとくとくと早鐘を打つ心臓にわたしはほうつとため息をつく。

「……今日はなにされちゃうのかしら」

アルレリオに抱かれるときわたしはアルレリオのされるがままになってしまう。貴族令嬢として貞淑に振る舞うことに神経を使いすぎて、彼を悦ばせることまで気が回らないのだ。もっとも、気持ちいいのなるべく我慢しようと試しても、声を上げないでいられたためしはないのだけれど。

「もしかして、もっと積極的に振る舞ったほうがいいのかしら」

転校した男子生徒は、わたしの胸をいやらしい目で見ていた。これに男性自身を挟みこんで、悦ばせる性技があるときいたことがある。そんないやらしいことをするなんて恥ずかしいけれども、アルレリオがもっと夜を楽しんでくれるならば頑張ってみようか

なと心が揺らいでしまう。

思い悩んでいると、やさしく扉をノックする音が響いた。跳ねる心臓を抑えながら「どうぞ」というと、制服姿のアルレリオが姿を見せる。これからいやらしいことをするのに、昼間と同じ格好で背徳感にドキドキしてしまう。

「ふふ、ボクに抱かれるためにそんなに頼りない恰好で待ってたのかい？」

キャミソールとショーツだけを身に着けたわたしを、アルレリオが視線で撫でる。それだけドキドキして、カラダの温度があがっていく。

「そろそろあなたが来る頃だと思って」

上目遣いでそう答えれば、アルレリオがにっこりと微笑む。二人分の体重でベッドの骨組みが軋む音をする。

「まいったな、そんなに潤んだ瞳で見つめられたら紳士じゃなくなってしまうそうだ」

「潤んだ瞳って……、あむっ♡」

ベッドに腰かけたアルレリオが、わたしの顔をのぞき込んだ。綺麗なマリンプルーの瞳にぼうっと見とれているとおもむろに唇を重ね合わされた。薄い唇に何度も角度を変えてキスされてると、いとも簡単にカラダの奥底から熱を呼び起こされていく。教室で劣情を必死に抑え込んでいたせいか、アルレリオの吐息を熱い吐息を感じるだけで秘裂がぬかるんでしまう♡

「んむっ♡はあっ♡アルレリオ♡」

「おや、ボクのルーチェはキスだけでエッチな気分になっちゃったのかな？」

アルレリオが骨ばった指をむにゆりと双丘に食い込ませる。薄い布越しのおっぱいがいやらしく形を変えた。アルレリオはその頂を指の腹でするりと撫ぜる。

「んっ♡」

「ほら、また触れるだけのキスしかしてないのにここ固くなってるよ」

根元から先端までゆっくりと指を這わせられると、ツンと尖った形を確かめられてい

るようで恥ずかしい。

「こんなに布を押し上げて、触られるの期待しちゃってるのかな？」

きゅっ♡きゅっ♡とキャミソールの布ごと乳首を摘まみあげられて、ぶるっ♡と背中が粟立つ。乳首から伝わる甘い痺れが全身に広がって、はふ♡と熱っぽい息が出てしまった。

「ルーチェはとっても素直だね♡また瞳がとろん♡ってしてきたよ♡そんなに乳首が気に入りならもっといじってあげる♡」

心なしか声を弾ませて、アルレリオはわたしの乳首をまたいじめてくる。やさしく指の腹で乳首の先っぽを軽く押し潰しながら円を描かれると思わず口を大きく開けて喘いでしまう♡

「ふあっ♡そこばかりい♡」

「はは♡舌出てるよ♡キスのおねだりかい？」

アルレリオの肉厚な舌がにゅると口腔に入り込んで、じわっと自分のものではない温度が粘膜に広がる。お互いの舌を擦り合わせれば、じわじわと唾液が染み出てくちゅくちゅといやらしい音が頭のなかに広がっていく。

「ふっ♡んだ♡」

いやらしいキスをしながら乳首いじめられるのすき♡誰からも慕われているアルレリオがわたしなんかと夜な夜な夢中になってエッチなことをしてるだけで胸がほの昏い欲望で満たされていく。

「はは♡乳首また固くなったね♡もうコリコリだ♡」

すっかり勃起したそれを指でつまみ、軽くぐいぐい♡と引っ張る。キャミソールの布越しに、根元から先端まで抜きあげられて、シコシコされるとぶるっ♡とおっぱいが震えてしまう♡

「はっ♡はっ♡ああ♡♡」

恥ずかしいはずなのにもっと触ってほしいとおねだりするようにおっぱいを突き出してしまふ♡視界の端に寝巻の薄い生地から透けているピンク色の突起が見えた。はずかしいのに、指の腹に乳首を擦り付けるように胸を左右に振ってしまふ♡

「んちゅ♡はは♡おっぱい左右に振っておねだりかい？本当にルーチェはエッチでかわいいね♡この前みたいにおっぱいイキさせてあげる♡」

おっぱいイキ、という下品な言葉の響きにびくっ♡とカラダが跳ねる。期待しているのを悟ったようにアルレリオがにんまりと少し悪い顔で笑った。

欲情した男の人の顔。きっとアルレリオにあこがれている級友たちは、アルレリオが瞳孔を広げておっぱいを必死でいじってるの知らない。それを意識しただけでまたこぶ♡と愛液が溢れ出してショーツを濡らしていく。

舌を吸われつつ、骨ばった指がおっぱいを押し込みながら乳首を小刻みに優しく揺らしはじめる。

「んむうつ♡」

乳頭の芯をぶるぶる♡ってされたら、カラダの奥から気持ちいいのが湧き上がってくる。奥を直接揺さぶられてるみたいに、我慢がきかなくなつて濁った声が出そうになる♡

「あ♡しゅれっ♡よわいからっ♡らめっ♡んむっ♡んぐゝっ♡」

ぢゅぶぢゅぶ♡とお互いの舌を擦り合わせ、唾液を滴らせながら、ひたすら乳首を刺激されていく。乳頭を強く押し潰されたと思えば、勃起した乳首の側面をやさしく指で撫でられて、緩急をつけた愛撫をほどこされる。乳首の気持ちいいところ全部刺激されちゃう♡

「あふっ♡んむっ♡アルレリオ♡」

媚びるような声で名前を呼べば、ぱっと乳首から指を離された。じんじんと疼くそこが切なくて思わずきゅっとアルレリオの制服の袖を引っぱれば、喉奥で笑われる。

「どうしたのかな、ルーチェ？」

「っ、ひどいわ、わかってるくせに……」

布の下でぼつてりと赤く腫れ上がっている乳首が切なさを訴える。キスも気持ちいいけれど、いやらしく開発されたいやらしい突起をいじめてもらいたくてたまらない。

「ルーチェ、どうしてほしいのか教えて？」

「——っ♡」

はちみつのようなどろりとあまい声に脳みそが痺れていく。はずかしいのに、餌を目の前にかざされた犬のように荒い息で呼吸しながらアルレリオに従ってしまう♡

双丘を自分で寄せて、アルレリオに見せ付ける。大きな果実のように膨らんだおっぱいの先端にぷくっ♡と大きな乳首が強調されて、まだ肌を見せてないのに自分のカラダがいやらしいとわかってしまう。アルレリオの欲情した視線を感じて、またぷくり♡と乳首が大きくなってしまう♡

「アルレリオ♡わ、わたしのいやらしいおっぱい、さわって♡あなたの指でわたしの固く勃起した乳首をたくさんいじめてほしいのっ……♡」

むにゅん♡と軽く自分でおっぱいを揉みながらおねだりすると、まだ指一本も触れられていない秘裂がひくひく♡とわななき始める。

「ふふ、かわいいルーチェの仰せのままに♡」

目を細めたアルレリオがむにゅり♡と手におさまりきらない白い柔肉を弄ぶように揉みしだきながら指先を先端に添える。ちよん♡と爪を立ててそのまま小刻みに指を上下に動かし始めた。

「——っ♡」

「ルーチェは乳首かりかりされるのが弱かったよね♡だいじょうぶ、ちゃーんとキミが気持ちよくなること覚えてるよ♡」

尖った乳首の先端をずーっと爪でやさしくカリカリされる。絹越しに敏感な突起の表

面を引っかかかっているだけなのに、頭がぼうつとして思わず太ももを擦り合わせてしま
う。

「あふっ♡ふうっ♡んだ♡」

触られてもいないおマンコがヒクヒク♡と震えてぬかるんで、ぷくっ♡とクリトリス
が大きくなつていく♡カラダがいく準備していることを悟って、思わず頭をいやいやと
振った。

「あ♡きもちっ♡いっ♡ちくびさわれると、ビリビリってしゅりゅっ♡」

「ふふ、ルーチェはほんとうに乳首が敏感だね♡いいよ♡乳首イキしょっか♡」

カリカリ♡カリカリ♡

ずっと爪で小刻みに引っかかれていやらしくされた乳首を、ぐに♡と広げられる。
乳輪を大きくされて乳頭も無理やり広げられて、爪が立てられる。

「あ♡♡」

アルレリオの指が、おっぱいの一番気持ちいい場所に狙いを定めたのがわかる♡アルレリオは普段の紳士さの名残を残した微笑みを浮かべながら、容赦なくそこを爪で引っ掻いた♡

かりゅっ♡カリっ♡かりゅっ♡

乳頭の奥の神経をほじられるように爪を食い込まされる。薄く敏感な皮膚をほじかえされれば、勝手に背中がのけぞっていく。

「お♡おん♡」

淑女の仮面が剥がれて、発情した獣みたいな声が喉から勝手に絞り出される。自分がこんな声出してるなんて、何度エッチしても信じられないのに、乳首が気持ちよすぎて発情したメス猫みたいになってしまう♡

「は♡かわいい♡いい♡敏感乳首でイっちゃおうか♡」

ぽってりと腫れ上がった乳首をぎゅっと乳房に押し込まれて引っかかれた瞬間、ぞく

ぞく♡とあまい痺れが全身に広がってひとりでにカラダが痙攣した♡

「お~~~~っ♡♡」

ビクンビクンと小刻みにカラダが震えて、どばっ♡と愛液が湧き出した。震えるカラダでアルレリオに抱きついて呼吸を整えれば、アルレリオの手が髪を梳きながら幼子をあやすように頭を撫でる。

「かわいい♡ちゃんと乳首イキできたね♡」

「ふっ♡アルレリオがっ♡乳首ばかりいいじるからあ♡びんかんになっちゃった♡」

「ごめんね♡」

誤魔化すようにアルレリオを睨み付ければ、婚約者はわたしをベッドにやさしく押し倒す。

そのままぺろんとキャミソールをまくられて、自重に従って横に流れようとするおっぱいを寄せあげられる。

「あっ♡」

布越しとはちがうアルレリオの手のひらの温度だけで感じてしまう♡アルレリオはただゆるやかな絶頂から完全に戻ってこれないわたしを見て満足そうに笑った。

「ふふ、本当にルーチェは敏感だね♡もっとおっぱい気持ち良くてあげたくなってしまうよ♡」

ふわふわの金色の巻き毛が、おもむろにわたしのおっぱいに近づいてくる。肉厚な舌を見せ付けるように伸ばされてぴくっ♡とまた乳首が尖っていく。

「期待しちゃってる♡いっぱいべろべろっしてあげるね♡」

「あ、アルレリオっ、んんっ♡」

乳房と乳輪の境目をくすぐるように舐められて、大げさに肩が震える。赤く腫れた突起には触れずに、焦らすようにまわりを舌でくるくる♡されてまたおマンコが震えてしまう♡

「あ♡アルレリオやだあ♡」

「ふふ、あとで乳首たくさんしゃぶってあげるから。ボクのものって証つけさせて？」
あたたかい舌がおっぱいを這いずり回って、まるでマーキングされるみたいにペロペロ♡ってされる。腋からおっぱいにかけての丸みを帯びたラインをたしかめるように舌でなぞられて、膨らんだ乳房をじゅっ♡と吸い上げられてキスマークをつけられる。骨ばった指でやさしく揉まれながらおっぱいペロペロされると、乳首に触れられてないのにずっとさざ波のような快樂につつまれてたまらなくなる♡

「くくふっ♡うぐっ♡」

乳首が切なくて、思わず手を伸ばそうとするとやさしく阻まれた。

「ふふ、焦らしすぎたかな？」

尋ねられてコクコクと頷けば、アルレリオが眉を下げた。

「ボクのフィアンセはとってもエッチだね♡いいよ♡いっぱいしゃぶってあげる♡」

肉厚な舌を伸ばして、頂きに近づいていくのを思わず凝視してしまう♡きつといまのわたしは、欲情しきった顔をしているんだろう。そんなことが頭の片隅でよぎるけれど、アルレリオを見詰めるのを止められない♡

ちゃん♡と尖った舌が頂きに触れて、そこから全身にビリビリときもちいいのがひろがってくる♡それだけで喉を晒しそうになったわたしを見て、アルレリオが笑いながら乳首をあたたかいくちのなかにすっぽりおさめてしまった♡

「あうっ♡ちくびっ♡たべられてりゅっ♡」

イクまで指で弄ばれたばってり腫れた乳首に、あたたかい唾液をじわじわと染み渡らせながらしゃぶられる。口の筋肉でぎゅう♡ぎゅう♡と固い乳首を締めつけられて、頭のとっぺんからつま先まで気持ちいいのが駆け抜けた。

「おほっ♡これらめっ♡しゅごいの♡ちくびちゅうちゅう♡って吸われるのだめえ♡」
四方八方を湿った肉壁で包まれて、乳首をねじるように筋肉が動く。突起の奥の気持

ちいい神経に響いて、ピンっ♡と足の筋肉がつっぱった♡

アルレリオが乳首を吸い上げながらも一方の乳房をまさぐる。そのまま二本の指で乳首をきゅっ♡とつままれて根元から先端まで何度も繰り返し抜き上げられた。

ぢゅぷっ♡ぢゅるっ♡ぢゅゝっ♡すりすり♡しこしこっ♡

左右違う刺激で乳首を刺激されて、パチっ♡と脳裏で軽く気持ちいいのがはじける♡
「あ♡これ♡またきちゃうっ♡きちゃうのっ♡」

おなかの奥がきゅんきゅんして、勝手に腰が高くかかげられていく♡おマンコには全然触れられないうちに、べったりとした恥ずかしい染みを作っていく♡

「あう♡まだおマンコっ♡さわられてもないのに♡」

腰を上げ下げてへこへこと情けなく感じるわたしに、アルレリオがにんまりと笑う。
ぺちん♡とアルレリオの肉厚な舌が、唾液まみれの乳首を叩く♡指先が先端を食い込ませて、乳房ごと神経をゆさぶる♡はやくイケ♡って急かされてるみたいな、強い刺激♡

高まったカラダで、これをこらえるなんて無理っ♡

「あひっ♡イっく♡また乳首でイっちゃう♡」

「いいよ♡またかわいい乳首イキ顔みせて♡」

アルレリオがひときわつよく乳首を舌ビンタする♡大きく肥大化して快楽器官と化した突起をべちん♡べちん♡と叩かれたら、そのリズムに呼応するように腰が震える♡

「っっ♡イクっ♡アルレリオに調教されたデカ乳首♡舌ビンタされてイっちゃうのお♡」

腰をぐっ♡とかかかて、触られてもないおマンコからどばっ♡と愛液が湧き出した♡
太ももを伝っていくそれが恥ずかしいのに、とめることなんてできない♡

「ああ♡イってりゅからっ♡アルレリオ♡もう乳首べちべちにやいれえっ♡」

「ん？もうペチペチはされたくないの？」

ぢゅぽん♡とアルレリオが乳首から唇を離せば、唾液にまみれてテロテロと光ってい

た。真っ赤に腫れたそれが外気に触れる刺激だけで、またイキそうになってしまう♡

「はっ♡はあっ♡」

まだ呼吸が整えているわたしの頬をやさしく撫でて、アルレリオは耳を疑う言葉を放つ。

「じゃあ今度はやさしく舌でぞりぞり♡ってしてあげるね♡」

「えっ、ちが、もうやめっ♡やああ?!♡」

さきほどまで指でいじくり回していた方の乳首をアルレリオがまるで傷をなめる犬のようにやさしく舐める。強い刺激ではないけれど、だからこそ敏感になったカラダが勝手に快感を追ってしまって、腰がビクビクするのがとまらない♡

「あふっ♡んぐ♡や♡もうなにされてもきもちいいのとまんやいの♡」

「んぢゅっ♡はは♡ボクのフィアンセはすっかり感じやすいおっぱいになっちゃったね♡」

れるお♡とゆつくり乳輪ごと舌で押し潰されてそのまま先端をチロチロと小刻みになめられる♡高みから降りてないカラダはまた簡単に押し上げられて、おマンコからびくっ♡と透明な液体を軽く噴き出した♡

「~~~~っ♡」

甘イキして潮吹きしてしまったことに涙目になっていると、アルレリオがごめんごめんと軽く謝ってから乳首から唇を離す。左右どちらの乳首もテラテラにされてしまっ、おマンコがうずうずしてたまらない♡

「おマンコ、もう熱くなって切ないよね♡こっちもかわいがってあげる♡」

アルレリオが下肢に手を伸ばそうとしたところで、まだともに働かない頭にふと先日の出来事がよぎる。わたしに向けられた侮辱的な言葉に胸が締めつけられるけれど、もっと情事を楽しむことができればアルレリオはわたしを好きになってくれるだろうか。気付けば自然と手が、窮屈そうにズボンを押し上げているアルレリオ自身に伸びた。

「ルーチェ？」

「わ、わたしも、アルレリオのこと気持ち良くしたいの。いいでしょう？」

上目遣いで整った顔を見詰めながら、カチャカチャと音を立ててベルトをはずす。布をゆっくりずり降ろせば、解放されたアルレリオの陰茎が勢いよく飛び出してきた。

ばるんっ♡と目の前でそそり立つそれに思わず生唾をのむ。いつも気持ち良くしてくれてるのに、意識してまじまじと見つめたことはないかもしれない。

「わ……、すっごい♡」

熱っぽい吐息を吐いて、根元から先端までを視線でなぞる。綺麗な顔に似つかわしくない、たくましいチンポ♡ガチガチに勃起したそれはダラダラと先走りを流して、早くメスのなかに入りたいって叫んでるみたい♡大きく張り出した雁首できもちいいところを挟まれる想像をしまって子宮がきゅんっ♡と疼いてしまう♡

屈んでたぶん♡と重い双丘でそそり立つおチンポを包み込む。谷間にうもれてビクビ

クとふるえているとなんだかわいく感じてしまう♡

「すごい♡アルレリオのおチンポ♡あつくて血管もバキバキだね♡」

「どうしたんだい、ルーチェ。今日のキミは積極的だね♡おっぱいやわらかくてきもちいいよ♡」

アルレリオは少し戸惑っていたけれど、心なしか声が弾んでいる。やっぱりアルレリオもわたしのおっぱいが好きなんだ。ズキリと胸の奥が痛むのに、それでも興奮してしまう。

丸い肉の膨らみを互い違いに動かしてすり合わせると、埋もれているアルレリオのおチンポがさらに膨れ上がって質量を増す。

「っ、ルーチェ……!」

「ふふ、アルレリオのおっきくなってる♡これ、すきななの?」

「ああ、ルーチェのかわいいおっぱいでチンポ擦られると思うとたまらなくきもちい

いよ……っ♡」

こんな単純なことで悦ぶなら、もっと早くしてあげればよかったと思いがたふたぶ♡とチンポを挟みこんだまま胸を上下に揺らす。アルレリオは眉を寄せて切なそうにうめいている。

「ふふ♡親に決められた婚約者なのに、パイ擦りされたら本当にわたしのこと好きになっちゃうね♡そんなにおっぱいすきななの？」

少し得意になって煽るように微笑めば、アルレリオが「は？」と低い声を響かせた。突然骨ばった手が胸を寄せ上げるわたしの手を掴む。

「アルレリオ？」

なにか気に障ったことをしただろうかと目線をあげれば、黙ってこちらを見据えているアルレリオと視線がかち合う。

「どうしたの？」

「ルーチェはボクが親同士が決めた婚姻に黙って従っているだけだと思っていたの？ほんとうにボクがそれだけでキミと結婚するって？積極的なのもボクに好きになってもらうため？好きになってももらうために媚びているのかい？」

ぐにゅ♡と乳房に指を食い込まされてながら詰問されて、困惑する。別れたくても別れられないならばせめて夜の手練手管だけでも努力しようとしたのに、アルレリオを怒らせてしまったらしい。

「気持ち良くしてあげたら、その、よろこぶかとおもったのだけれど、ダメだった？」
アルレリオの顔色を伺いながら上目遣いで問えば、しばらくじっと感情を読み取れない瞳でこちらを見ていた婚約者はにっこりと笑みを貼り付けた。

「そう。じゃあボクも気持ちよくしてあげたらもっとルーチェに好きになってもらえるかな？」

「え？」

自分でおっぱいを寄せていた手を剥がされて、ベッドにカラダを押し倒される。ぐい
♡と太ももを持ち上げられて、興奮して膨らんだ肉土手をぐに♡と広げられた。

「や、アルレリオ」

「おっぱいばかりでおマンコ切なかったよね。それとも、ボクのチンポをおっぱい擦
りして興奮しちゃった？」

指でぶにぶに♡と肉土手を押されて、染み出た愛液を指で掬われる。粘膜には触れら
れていないのに、ぷつくらしている場所を触られるだけでヒクヒクと秘裂が震えて愛液
が滴ってしまう♡

「あ♡んぶ♡」

「親に決められた婚約者にマン肉揉まれてそんな切ない声出しちゃうんだ？ルーチェっ
たら淫乱なんだね♡」

秘裂の表面だけ指で撫でられて、くちゅりと淫猥な音がする。滴った愛液を掬った指

をすり合わせれば、ぬちぬちと粘っこい音をだして糸を引いてしまう。ゆっくりエッチなことされるのは同じだけど、なぜか今日のアルレリオは意地悪な言葉を囁きながらわたしを責めたてる。

「や、やらっ♡」

「やだ、じゃないでしょ♡こんなにおマンコ真っ赤にテラテラさせて、クリトリスも勃起して。おおきくぶくっ♡と膨らんでおマンコから飛び出てるよ♡」

勃起したクリトリスの大きさをたしかめるように、根元なら先端までゆっくりと指でなぞる。指が滑る感触にびく♡と腰が跳ねた。

「まったく、ルーチェは敏感だなあ♡でも、もーっと気持ち良くなりたいんだよね♡もしたらもつとボクのこと好きになってくれるんでしょ♡それならもつと早く言ってくればよかったのに♡」

アルレリオがベッドに身を伏せて、整った顔だけこちらに向ける。そのまま腰を引き

寄せよられて、まさかと目を剥いた。逃れようと身を振るが、腰をがっしりと掴んだアルレリオの手を振る払えなない。

「や、アルレリオ、あなたがそんなことしないでいいからっ」

「はは、おかしいことをいうね。どうして逃げようとするんだい？ここはこんなに期待してるのに」

熱い吐息が秘裂にかかって、ぶるつとカラダが震える。こんなことさせちゃだめなのに、おマンコが期待してヒクヒク♡と口を開閉させていく。

「はは♡かわいい♡たくさん舐めてあげる。いままでもしてあげたかったんだけど、ルーチェが恥ずかしがると思って我慢してたんだ♡キミのエッチなお汁、たくさん味わってあげるね♡」

おそろしいことを口にしながら、アルレリオはためらいもせずにおマンコに舌を伸ばした。力の入ってない柔らかい舌がゆっくりと愛液を垂れ流す蜜穴の表面を舐め上げる。

ぬるっとしたあたたかい感触に腰がビクビクと震えてる♡

「んあ♡はっ♡」

切なげな吐息を漏らしてしまつてあわてて口元を手で覆うと、アルレリオが不服そうに眉を寄せる。

「……せつかくのかわいい声、聞かせてくれないのかい？じゃあ声ががまんできなくなるくらいきもちよくしてあげようね♡」

柔らかい舌がクリトリスを覆うように張り付いて、ゆっくりと舌のわずかなざらつきに引っかけるように舐めていく♡ペロペロ♡れろれろ♡あたたかい唾液で濡らされながら、表面を舐められるとどこかしい♡気持ちよさと羞恥がまざつて、どうすればいいかわからなくなつてしまう。

「あふっ♡んだ♡や、やめてえ♡そ、そんなところ、なめないで♡」

美しい想い人に下品な真似をさせて、おマンコ濡らしている自分に耐えられなくて涙

声になる。いやいやと首を振ると、アルレリオはれろれろとクリトリスを愛撫しながら不思議そうに首を傾げた。

「どうして？ おっぱいでチンポ擦るのだって、充分下品でエッチなことだよ？ ボクがここを舐めるのも、おなじでしょ」

「ちがつ、アルレリオはそんなことしないでいいのっ……！ お♡おほっ♡」

頑なに拒んでいると、唐突にあたたかくて湿った肉壁がすっぽりと敏感な突起を覆った。わずかに上体を起こしてのぞき込むと、アルレリオの唇がおマンコに吸い付いているのがわかる。クリトリス、アルレリオのくちでもぐもぐ♡ってされてるんだ♡

「え、アルレリオっ♡おくちにそんなのいれちゃめっ♡んば♡」

やわらかくてあたたかい肉の壁にクリトリスを覆われているだけでも気持ちいいのに、アルレリオは口をもごもごと動かし始めた。敏感な肉豆に四方八方からやらかい粘膜が迫ってきて、圧迫していく。そんなことされたらクリトリス、もっとピンピンに勃起し

ちやう♡

「にゃあ♡しよれっ♡ら、らめっ♡」

頭を引き剥がそうとふわふわの金髪の巻き毛を押しかえそうとするけれど、力が入らない。アルレリオが喉奥で笑った振動さえ、クリトリスをぶるぶる♡と震わせてまたとぷっ♡と愛液が滴ってしまう♡

「だめ？そっか♡もつと気持ちよくなるばしよがあるかもしれないしっしよに探そうか♡」

クリトリスにたっぷりの唾液を染み渡らせながら、裏筋をゆっくりと舐め上げられる。弱い場所に唾液を塗りつけられて、腰がびくり♡と浮いた。

「あ♡」

「へえ♡ここ、弱いんだね♡」

アルレリオがそう呟いて、また力が入っていない柔らかい舌をびったりとクリトリス

に押し当てた。そのままゆっくりと舌を波打たれて、おもわずぎゅっ♡とシーツを握る。
秘豆をぐにぐに押されて思わずおマンコパクつかせてしまう♡ビクビク♡って腰が跳ね
てほんとうはいやじゃないのバレちゃう♡

「は♡かわいい♡すきなばしょ、ルーチェが教えてくれなくてもカラダは素直だね♡
たっぷり裏筋レロレロ♡ってして、クリふやけるまでなめてあげようね♡」

「ふやけるまでっ、って♡そんなん♡♡」

熱い舌がぴったりと裏筋に張り付き、何度もゆっくりと上下する。舌が動くたびに、
肉豆があまく痺れて、背中を瞬く間に駆け上がって頭も麻痺していく♡恥ずかしさとか
申し訳なさが霞んでいって、もっと思いきりクンニしてほしい♡むくむく♡ってクリト
リスが大きくなって、いじめられるの期待しちゃってる♡さつき波打つ舌でぐにぐに
♡ってクリ責めされたのもっとほしい♡

「ふっ♡ふーっ♡うづ♡♡」

腰を思わず揺らめがせれば、ぐにゅ♡と舌にクリトリスが押し潰されてしまう♡瞼の裏で火花が点滅してびくっ♡と腰が跳ねた。

「ん？もつと舌でエッチなお豆さんおさえつけてほしいのかい？ごめんね、気付いてあげられなくて♡乳首もさみしそうだ♡キミの愛液がおいしくてついついここにばかり集中してしまったね♡」

秘部に舌を這わせたままアルレリオが腕を伸ばして、おっぱいをむにゆりと揉みしだく。散々舐めしゃぶられて腫れた乳首を、また指が掠めた。

「ひゃう♡」

「はは♡かわいい声♡我慢なんてやめて、おっぱいとおマンコいじられて悦くなっちゃおうね♡」

ぢゅるるっ♡と下品な音を立てられながら愛液ごとクリトリスをすすられる。肉豆をぶるぶる振動させられながら、ピン♡ピン♡と乳首をはじかれる♡弱い場所ばかり的確

に責められたら、もう声なんて抑えられない♡

「んおっ♡ほおっ♡しゅれっ♡よしゅぎりゅっ♡らめえ♡」

呂律がまわっていない甘い甘ったるい声に、おなかの奥がきゅん♡と疼く。あられもない自分の姿に、興奮してる♡情けなくてはずかしいはずなのに♡おマンコひくひく震えるのとまらない♡指で乳首を挟まれてシコシコ♡と抜き上げられて、気持ちいいこと以外なにも考えられなくなるっ♡

「んぢゅっ♡はは♡すっかりクリトリスもおおきくなっちゃったね♡ボクに愛されやすいようにちゃんとデカクリになれてえらいよルーチェ♡乳首もまたすっかり固くして、ほんとうにいやらしいね♡そんなにボクとのエッチ気に入ったのかい？」

アルレリオがゆっくり、クリトリスの輪郭をたしかめるように舌で恥豆のふちをぐるりとなぞる。大きくなったことをたしかめるように何度もぐるぐる♡されて、カラダが熱くなってしまう♡

「ふっ♡うう♡アルレリオ、やめてえ♡」

「はは、焦らしすぎたかな？もうイキたいよね♡」

「ち、ちがつ、おっ♡おほっ♡」

わたしの言葉をかけてにおねだりだと解釈したフィアンセはクリトリスの亀頭にぴったりと舌を押し当てたまま、左右にゆっくりと動かし始めた。肉芯を刺激するようなその動きに、ピン♡と足の筋肉がつっぱっていく♡

「ひうっ♡おマンコっ♡あちゅっ♡」

「ん？乳首よりおマンコがいいかな？ずーっとヒクヒクしてるもんね♡かわいいがってあげる♡」

腫れ上がった乳首から指がぱつと離れて、カラダを撫でながら下へと滑っていく♡ぼつてりと腫れ上がったクリトリスからアルレリオが顔を離れた今なら、クンニなんて恥ずかしい行為をやめられるのに、すっかり火照ったカラダには力なんて入らない。

内股の皮膚の薄い場所を撫でられて、とろお♡とまた愛液が垂れていく。

「ルーチェは恥ずかしがり屋さんだけど、その分カラダが素直だね♡さみしがりやのおマンコ♡いまなぐさめてあげるね♡」

骨ばった長い指が、くちくち♡とおマンコの浅瀬をかき混ぜたかと思うと、ゆっくりとナカへと侵入してくる。

「お♡おお♡」

入ってきた人差し指をまるで歓迎するように締めつけていくおマンコがはずかしいのに。濁った喘ぎ声をあげるのやめられない♡でも、これで恥ずかしい場所を舐められるのはおわたんだとほっと息を吐く。ゆっくり指が肉襞をかき混ぜていく感覚に感じ入っていると、またぬるりとした感触がおマンコに走った。

「ひあ♡な、なんでっ♡」

「どうしてって、今日はキミを気持ち良くするって決めたからね♡いつも指でおマンコ

かき混ぜられただけでいやらしいメス穴も顔もトロトロにしちゃうキミをもーっとボクに夢中にさせてあげる♡」

クリトリスの亀頭をねっとりとなぶりながらざらついた天井を、おなか側へトントン♡と押し上げる。ナカとソト同時に責められて、頭の中で弾ける火花の勢いがだんだん増していく♡パチパチ♡パチパチ♡理性を焼き切るみたいにずっと弾けてる♡

「お♡おほっ♡しよれっ♡らめにゃのっ♡クリのさきっぽ♡れろれろっ♡ってしながらっ♡ナカのよわいばしよ指でおしやないでえ♡」

ガクガク♡と腰が勝手に震えて、尿意に似た感覚が迫り上がってくる。得体の知れない感覚がこわいののに、カラダの熱が高まるのをとめられない♡

「やらっ♡アルレリオ♡にゃんかくるっ♡きちやう♡はなしてえ♡」

パンパンに膨れ上がったクリトリスがむずむずした感覚を訴えて、なにかを吐き出したい欲が膨れ上がっていく。やめて、と訴えかけたのにアルレリオはぺちん♡とクリト

リスを舌で強くはじいた。

「おっ？！♡」

「ふふ♡もしかしてお潮ふきたくなっちゃったかな？ いいよ♡たくさんびゅーびゅーっ♡ってしようね♡」